

【学力向上フロンティアスクール中間報告書】

都道府県名	長野県
-------	-----

学校名及び規模

学校名	長野県飯田市立竜峡中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	2	8	21
生徒数	50	72	71	4	197	

研究の概要

(1) 研究主題

「確かな学力」を一人ひとりの生徒について習熟度でとらえ、それぞれの生徒の力を伸ばすには、どのような手だてをとったらよいか。

(2) 研究主題設定の趣旨

本校生徒は、概ね、明るく楽しい雰囲気在学习中。穏やかで落ち着いているが、時に集中力を欠き、思考が空回りすることも多い。また、自分のつまずきを表出したり、自力でねばり強く解こうとする姿勢も弱い生徒も多い。

その原因としては、個人差・能力差が考えられる。例えば数学で言えば基礎基本の学力である計算力での差が著しい等である。

そこで、このような生徒に確かな学力をつけるために、一人ひとりの個のつまずきに応じたきめ細やかな指導が大切と考え、習熟度別授業を実施した。そのうえ、さらに課題別等のグループ学習も取り入れるなど学習形態の工夫も考え、より確かな学力を付けようとした。

差や違いがある生徒に対して、少人数学習という学習形態の良さを十分に活用し、それぞれの学力や学習に向かう姿勢の良さを伸ばしていきたいと考えた。研究の実践は、昨年度に引き続き、少人数授業の加配教員を有する数学科、英語科を中心に進めることとした。

研究の概要

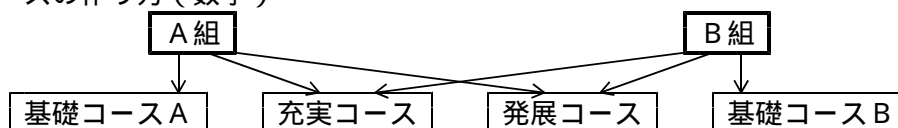
(1) 研究推進体制の工夫

1. 数学科では全学年二学級を、四人の教師で指導する体制をとり、関係する教師五人で「少人数授業推進委員会」を構成した。昨年度は、一・二年生で実践したが、本年度は全学年を対象にしたため各学年の責任者を定め、推進を計画的にできるようにした。また、昨年度は一学年を三人で指導したが、本年度は四人で指導するようになった。
2. 授業は、TTで実施する部分と習熟度によるコース別学習による部分の二通りとした昨年度の方法から、本年度は、全単元で習熟度によるコース別学習とした。また、コースは年度途中で変更をした。
3. 本年度は、英語科においてもコース別学習を実施した。職員数の関係で、英語科では、一学級を二コースに分けて指導するようになった。

(2) 研究の実践

1. 習熟度別コースの設定

コースの作り方(数学)



基礎コースは、原級の学習集団を大切に考えた。

習熟度の決めだし

コース決定は、生徒自身の希望を主にするが、診断的プレテストを実施し、判断指導の参考にした。生徒の希望が一つのコースに集中する場合もあり、プレテストの結果や定期テストの結果などから第二希望への変更を促す場合もあった。

公開授業の実施

保護者参観日に数学の授業を組み込み、保護者にも公開すると共に、感想用紙に記入して頂き、指導の参考にした。

【保護者感想】

- ・基本的なことを時間をかけていねいに教えて下さり有り難い。(基礎コース)
- ・黒板に書いてあることが分かり易い。(発展コース)

生徒の自主的選択と自己理解を重視し、固定化をなくす。

プレテストや授業を進める中で、自分の学習の伸びを自覚できるようになった。また、コースを通年固定化すると生徒自身が自己理解を誤ったときや、伸びを実感したとき、分野による得意不得意等によるコース不適應を起こすという弊害を避けるため、計算や図形など内容が変わる毎にコース選択をし直した。

【単元の変わり目でコースを変更するときに行う意識調査の生徒の感想より】

数学が好きになったから。

難しい問題が解けてうれしかったから。

もっといろいろな問題を解いてみたい。計算問題をたくさんやるのではなく難しい問題をやりたい。

ペースが自分に合っている。

授業の進みが自分に合っている。

自分に合っているコースだと思う。

関数は苦手なので基礎からやった方がいいと思った。(基礎コースを選択した生徒)

関数のグラフを読みとって式にするというのが不得意だから。(発展で学習していた生徒が充実コースを選択した理由)

2. コース毎の単元展開を作成

【2年生「図形の調べ方」三角形の3つの角の和が 180° であることを証明する場面】

プレテストの分析から

「三角形の3つの角の和は何度か」という設問に対し、多くの三角形の角を測定し実測の経験から 180° ということが分かると理解している生徒は8人だけと考えられた。更に、実際に三角形の紙をちぎり並べることにより半回転の角を作ることができるということを知っている生徒はいなかった。小学校段階で実験・実測の経験を十分にこななかったと推測される。

また、三角定規のような特殊な一つの三角形の角を測り、「三角形の3つの角の和は 180° 。」と説明づけて疑問を感じない生徒が多い。この点を意識付けての単元展開が必要であると考えた。

それぞれの指導目標(到達させたい目標：Bの段階)を設定し

基礎コース：紙で作った三角形の角を1カ所に集めることにより、視覚的に 180° になることを確かめられる。平行線を引き同等の角を作り、説明できる。

充実コース：実際の操作は正確さを欠くことに気づき、正確な説明のために平行線を引き、角の移動によって説明できる。

発展コース：角を移動する点がどの頂点でもよいことに気づき平行線の同位角や錯角が流行に使われることに気づき、他の例を追究できる。

指導方法を次のように決めた

基礎コース：実際に3つの角の角度を測り、計算して確かめてから、平行線の性質に目を向けさせ角の移動を操作させる。

充実コース：三角形を三本の直線でできる図形という見方をさせる。

発展コース：三角形の3つの角の和が 180° であるという性質を発展させ、四角形や多角形の内角の和を求めるところまで追究させる。

3. 個に応じた指導の工夫

教材研究

- ・生徒のつまずきの原因が、素地力がないためなのか、理解力がないためなのかを見極める。また、その単元の学習内容に対する見方や興味関心も把握し、課題を吟味する。プレテストの実施により、それらを把握する。

指導方法の工夫

- ・習熟度別にする事で、学び方が類似した小集団になっているが、問題を解こうとして、練り上げる場面では、生徒の中に様々な考え方が出現する。更に、その解き方の違いによる小さなグループを形成し、それぞれの方法で追究させる。
- ・基礎コースにおいては、問題を解決するための道具としての計算力の定着が十分でない者がいる。それは、学年があがる毎に顕著になってくる

そこで、毎授業開始時に基礎的計算力の向上を目指し、基礎的な計算問題を10問ずつ(正負の計算、四則計算、文字式、各種方程式、図形の計測等)を実施した。

【3年生の基礎コースで同様の問題を1ヶ月後に実施した結果】

平均点：正答率にして12%向上が確認された。

向上の様子：向上がみられなかった生徒が20%いるものの、50%以上の生徒に点数の向上がみられた。

(3) 研究の成果と課題

1. 習熟度によるコース別学習により、生徒の理解度や学習意欲が増した。
 - ・生徒は、わからないときに聞きやすいとか、ていねいに教えてもらえるという意識で学習をすることができた。
2. 習熟度によるコース別学習が定着することで、保護者や生徒に理解が得られ、コースに対する偏見がなく充実感があるものとする事ができた。
 - ・基礎コースを選択する生徒も、卑屈にならずに学習に集中している。基礎からゆっくり学習したいという生徒が比較的多く、基礎コースや、充実コースに希望が集中する。
3. コース毎の到達目標を設定することで、教師はつまずきを予想しやすく具体的な指導の手だてなど指導目標を持つことができた。
 - ・習熟度の利点を生かし、目標がはっきりした。

(4) 研究成果の普及の方策

1. 昨年度は数学科のみの試みであったが、本年度は英語科でもコース別学習を実施できた。更に他教科にも何らかの方法を広げていく。
2. 研究会等に参加し、本校の取り組みを紹介していく。
3. 公開授業によって、本校の取り組みを、広く他校職員や保護者、地域の方々に観ていただく機会をとる。

(5) その他

基礎学力の根っこを支える力の向上を目指し、教科指導の他に全校でいくつかの取り組みを実施した。

1. ベイシックタイム(ドリル学習)の実施
 - ・暗唱、筆写、数学、英語の四分野を一週間に一回ずつ15分間ドリル学習をした。
2. 朝読書の実施
 - ・水曜日を除く毎朝始業時に10分間全校生徒が読書をしている。静寂の中に一日のスタートをきる事ができる。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 3学級以下 4～6学級
 7～9学級 10～12学級
 13～15学級 16学級以上

【指導体制】 少人数指導 T.Tによる指導
 その他

【研究教科】 国語 社会 数学 理科
 外国語 音楽 美術 技術・家庭
 保健体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無

【特色ある取組事例として紹介したいポイント(都道府県教育委員会記入)】